

**ハンセン病の人々と交わる聖フランシスコ**  
**—信仰のまなざしで味わういくつかの気づき—**  
《聖フランシスコの生涯をていねいに味わいたい人向け③》

**(1) 回心のはじまりの時期—ハンセン病の人々と交わりはじめた時期—**

聖フランシスコは、イタリア、アッシジにて、裕福な商人の家に生まれました。1205年頃（23歳の頃）には、戦場で功績を上げて騎士になるため、出かけました。しかし、その道中、夢において神さまからの働きかけを受け、騎士になるのを断念し、アッシジへ戻ります。

アッシジへ戻った頃、1205年8月の初旬、ハンセン病の人々と交わります<sup>1</sup>。聖フランシスコは、『遺言』の冒頭において、この出来事を「回心のはじまり」と捉えています。

聖フランシスコのそのことばを少し味わってみます。

- 1 主は、わたし、兄弟フランシスコに、回心を行うことを次のように始めさせてくださいました。  
わたしが罪の中にいた頃、ハンセン病の人々を見ることは、あまりにも苦いものに思われました。**
- 2 すると主ご自身がわたしを彼らの中に導かれ、わたしは彼らと共にいつくしみを行いました。**
- 3 また、彼らのもとを離れると、わたしには苦く思っていたことが、わたしにはこころと体の甘いものに変えられました。  
その後、わたしはしばらくとどまり、世から出ました。**

**(2) 「主は、わたし、兄弟フランシスコに、回心を行うことを次のように始めさせてくださいました。」**

- ・ **償いということばへのイメージ**：『遺言』において「回心を行う」と訳していることば (faciendi penitentiam) は、「償いを行う」とも訳せる表現です。「償い」というと、日本語では、罪、過ち、損失に対して、それに相当する金銭、物品、行為で埋め合わせすることを指します。教会では、神から罪をゆるしていただけるよう、こころから悔い改め、断食、節制、施し、祈り、信心業などを行うことを指すようになりました<sup>2</sup>。
- ・ **「回心を行う」ことは「いつくしみを行うこと」**：ここで聖フランシスコが述べている「回心」（償い）ということばは、2節の「いつくしみ」という表現と同じことを意味しています。「回心を行う」という表現と「いつくしみを行う」という表現は、おそらく意図的に「～を行う」という動詞で結ばれています。言い換えると、聖フランシスコにとって回心を行うとは、**あたたかなこころに生かされる状態**を指しているでしょう<sup>3</sup>。

ちなみに、福音書ではとりわけ、神さまに深くより頼みながら、神さまに支えられて、神さま（イエスさま）のあたたかなこころに生かされる**ことが回心**と言えます。

---

<sup>1</sup> Cf. DI FONZO, Lorenzo, *Per la cronologia di S. Francesco. Gli anni 1182-1212*, Edizioni Miscellanea Francescana, Roma 1982, p.112.

<sup>2</sup> Cf. 清永俊一「償い」、『新カトリック大辞典』KOD版。

<sup>3</sup> カエタン・エッサー『聖フランシスコの会則と遺言—フランシスコに従う現代人のための講話—』（ESSER, Cajetan, *Rule and Testament of St. Francis. Confernces to the Modern Followers of Francis*, OFM Province of Sacred Heart of Jesus, USA）フランシスコ会日本管区訳、教友社、習志野 2009年、p.143：「フランシスコがここで述べている悔い改めの生活とは、感謝のうちに、自分に背を向けて神に向かう生活のことです」。

MARANESI, Pietro, *Il Testamento di Francesco di Assisi. Una memoria ammonitiva per la fedeltà alla vocazione minoritica* in Felice Accrocca e Pietro Maranesi, *I testi e la vita. Francesco e la prima testualità normativa della fraternità minoritica*, Il Pozzo di Giacobbe, Trapani 2011, p.98：「神は、若いフランシスコの自分自身、他者、神に対する見方を変え始めました。こうしてフランシスコの生き方は、成果でも自己主張でもなく（修道者としての成果、自己主張でもなく）、自分を無償でささげるものとなります。この姿勢によれば、自分自身のために何も求めません。自分の歩みに神が届けてくださったいつくしみを必要としている人々に対して、真理と誠実さをもって世話をします。したがってフランシスコの書き物において、回心の生活を始めるということは、いつくしみを行い始めることとまったく同じ意味です」。

- ・ **自分の何らかの努力を超え、神さまによる無償の働きによる回心**：聖フランシスコは、「自分の分析、気づき、努力、成果、または信仰上の努力、禁欲的節制によって神さまのあたたかなところに生かされるようになった」とは述べていません<sup>4</sup>。「主が……させてくださった」と述べています。神さまからの無償のいつくしみ深い働きかけによるものです<sup>5</sup>。
- ・ **絶えず続く回心の歩み**：回心の歩みには終わりがありません。後で見るように、回心は神さまの限りないいつくしみに生かされることですから、終わることがありません。聖フランシスコの大伝記が、聖フランシスコの晩年のこととして、次のように伝えているとおりです。「しばしば兄弟たちに、次のように言っていました。『さあ、兄弟たちよ、今から主なる神に仕え始めましょう。わたしたちは今までほとんど進歩してこなかったのだから』。謙遜な初めのころに戻ろうという大きな願望に燃え、初めの頃に行っていたハンセン病の人々の世話をするために、労苦のために今やほとんど壊れかけた体を奴隷のように取り扱ったのでした。……まさしく、愛の刺激がより偉大なことへと駆り立てるときには、怠惰や無為の入り込む余地はありません」(1・14・1)<sup>6</sup>。

回心前の聖フランシスコにとって、ハンセン病の人々を見ることは「あまりにも苦い」ことでした。しかし、回心をはじめた後の聖フランシスコにとって、「あまりにも苦い」人々は、自分の理想とは異なる多くの人々、とりわけ、より小さき兄弟会において自分の思いとは異なる生き方をする兄弟たちだったと思われる。この意味でも、聖フランシスコの回心の歩みは最期まで続くものでした。

### 《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **神さまからの無償のいつくしみ深い働きかけ**：「自分の分析、気づき、努力、成果によって素晴らしい歩みができた」という思いは、一見肯定的です。とは言え、自分が中心でもあります。「主が……させてくださいました」という思いには、自分の考えや力をはるかに超えた神のあたたかな働きかけを深く感じている状態があるでしょう。
- ・ **絶えず続くあたたかなところを分かち合う歩み**：わたしたちには、強く意識して神さまの望みに応えようとするときもあります。それは、教会における洗礼・堅信・結婚式、奉獻生活会における修練・修道誓願宣立式、助祭・司祭の叙階式で終わるものではないでしょう。あたたかなところ、いつくしみを分かち合うように、日々の生活における人との関わり、様々な出来事を通して、神さまから常に招かれ続けています。

聖フランシスコにおいても、後述するような「苦いもの」は形を変えて存在し続けました（知識を自分のものと捉えて傲慢になる者、細かい規律を増やすことで立派な修道生活を送れると考える者、教会の教えに従わない者、自分の考えを優先して上長に従わない者、など）。わたしたちも、人間関係で困難に直面するときもあるでしょう。たとえ良好な関係を築けなくても、相手の方々の深い意味での幸せを願うなど、あたたかなところを大切にする歩みへと招かれています。

### (3) 「わたしが罪の中にいた頃」

- ・ **回心後の変化を強調する表現方法**：初期の伝記によると、聖フランシスコは、両親の教育が良くなかったためひどい生活を送る一方、仲間や貧しい者に寛大だったようです。ただし、このような書き方は、昔の聖人伝の特徴の一つです。回心前と回心後をととも対照的に描くことで、聖人や神の働きかけの素晴らしさを表現する方法です。家族のことは極端に否定的に記されてい

<sup>4</sup> Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, Edizioni Porziuncola, S. Maria degli Angeli – Assisi, 2007-2024<sup>2</sup>, pp.89-90; -, *Per-dono per lo tuo amore. La via alla pace di Gesù e Francesco d'Assisi*, Messaggero di sant'Antonio, Padova 2025, p.104; -, *Il mio Testamento. Le ultime parole di Francesco ai suoi frati*, Cittadella Editrice, Assisi 2026, pp.56-57.

<sup>5</sup> Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, p.67.

<sup>6</sup> Cf. PAOLAZZI, Carlo, *Lettura degli Scritti di Francesco d'Assisi*, Edizioni Biblioteca Franciscana, Milano 2015, p.429.

る可能性があります<sup>7</sup>。

- ・ **聖フランシスコの罪の根本**：「わたしが罪の中にいた頃」ということばがどのような生活状況を指しているのかは、分かりません。聖フランシスコの書き物などから想像できるのは、聖フランシスコは若い頃、まだ信仰を深く生きていなかったということです。神さまのことをあまり思い起こさず、お金をたくさん使って遊び、歌、流行を求めていたでしょう<sup>8</sup>。自分の望み、意志、計画を自分で実行するという、自分をすべての中心とする姿勢を指しているでしょう<sup>9</sup>。

### 《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **神さまからの無償のいつくしみ深い働きかけ**：既に触れたように、「自分の分析、気づき、努力、成果によって素晴らしい歩みができる」という思いは、一見肯定的ですが、自分が中心でもあります。「主が……させてくださいました」という思いには、**自分の考えや力をはるかに超えた神のあたたかな働きかけを深く感じている状態**があるでしょう。
- ・ **喜び・満足感**：わたしたちには、様々な形の喜びがあります。一時的、表面的な喜びもあれば、困難においてもいつくしみ深い神さまが共にいてくださるといふ深い喜びもあります。一時的、表面的な喜びのすべてが悪いわけではないでしょう。満足感も、生き生きとさせてくれます。しかし、それらをあまりにも求め続け、頑なになったり、傲慢になったり、神さまのあたたかなところを大切にできないなら、悲しいことです。**神さまの助けによって、ありのままの気持ちを受けとめ、神さまにおゆだね**できたら。

### (4) 「ハンセン病の人々を見ることは、あまりにも苦いものに思われました。すると主ご自身がわたしを彼らの中に導かれ、」

- ・ **ハンセン病の状況**：「ハンセン病」と便宜上訳していますが、実際には、その他の病、皮膚病の人々も含まれていたと思われまゝ。当時、ハンセン病の人々に対して、多少の慈善活動は行われていました。しかし、彼らは町の外で生活し、人々から避けられました。自分たちでは、生活状況を変えられませんでした<sup>10</sup>。
- ・ **アッシジにおけるハンセン病の人々の療養所**：この出来事がアッシジにおける療養所の近くで生じたとすれば、アッシジの城壁の外にあるリヴォルトから天使の聖マリア教会（ポルツィウンコラ）よりに1キロほどのところにある「マグダラの聖マリア」療養所（現在は小聖堂）、または、そこから数百メートル、アッシジの丘の方に上ったところにある「アルチェの聖ルフィノ」療養所が、当時は、アッシジのハンセン病の人々の中心的住まいであったとされています。その他、セルヴァ・グロッサ療養所やパレーティのサン・サルヴァトーレ療養所などがありました<sup>11</sup>。

<sup>7</sup> Cf. ACCROCCA, Felice, *Presentazione alla Vita del beato Francesco [Vita prima] di Tommaso da Celano*, in *Fonti francescane. Terza edizione*, Editrici Francescane, Padova 2011, p.244.

<sup>8</sup> Cf. ACCROCCA, Felice, *Francesco, un nome nuovo. Vita di un uomo santo*, Messaggero di sant'Antonio, Padova 2014, pp.19-21.

<sup>9</sup> Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.69-74.

<sup>10</sup> Cf. シッパージェス、ハインリッヒ『中世の患者』（SHIPPERGES, Heinrich, *Die Kranlen im Mittelalter*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München 1990）濱中淑彦監訳、人文書院、京都 1993 年、pp.139-143；ル＝ゴフ、ジャック『中世の身体』（LE GOFF, Jacques et TRUONG, Nicolas, *Une histoire du corps au moyen age*, Editions Liana Levi, 2003）池田健二、菅沼潤訳、藤原書店、東京 2006 年、pp.157-160；フルゴニー、キアラ『アッシジのフランチェスコ—ひとりの人間の生涯—』（FRUGONI, Chiara, *Vita di un uomo: Francesco d'Assisi*, Giulio Eniaudi editore, Torino 1995 e 2001）三森のぞみ訳、白水社、東京 2004 年、p.47.

<sup>11</sup> Cf. CANIL, Egidio, *L'Ospedale dei lebbrosi e le altre Chiese presenti sul territorio di Rivotorto*, in AA.VV., *San Francesco e Rivotorto. I primi passi della fraternità francescana, il santuario, il territorio*, Casa Editrice Francescana – Assisi, 2004, pp.277-295；FORTINI, Arnaldo, *Nova vita di s. Francesco*, Carucci editore, Roma, 1981, pp.266-273；CANONICI, Luciano, *Lebbroso, lebbrosario*, in *Dizionario francescano. Spiritualità*, II edizione riveduta e ampliata, CAROLI, Ernesto (a cura di), Messaggero di s. Antonio, Padova 1995, 967-969.

・ **ハンセン病の人々を受け入れられなかった聖フランシスコ**：聖フランシスコにとってハンセン病の人々を受け入れるのが非常に困難であったことは、チェラーノのトマス『祝福されたフランシスコの伝記（第一伝記）』17 で、こう記されています。「ハンセン病の人々を見ることが、非常に耐え難いことであったということは、彼が虚栄に包まれた日々を送っていた頃、二マイルも先にある彼らの住居を目にしただけで、両手で鼻を覆ってしまうほどだったと語っていたほどのことでした」。聖フランシスコにとって、ハンセン病の人々を受け入れることは、自分の力では克服できない大きな壁であったことがうかがえます。

・ **神さまの無償のいつくしみ深い働きかけによってへりくだる**：聖フランシスコは、「神さまによって」ハンセン病の人々を受け入れることができるようになったことを強調しています。神さまの助けによってハンセン病の人々の痛み、悲しみ、苦しみを受けとめることができるようになったことが含まれているでしょう。イエスさまが、人々の痛み、悲しみ、苦しみを深く受けとめておられた様子も思い起こされます。

社会から見捨てられ、自分自身からも受け入れることのできなかつたハンセン病の人々を受け入れる姿勢には、深くへりくだる状態が含まれています<sup>12</sup>。

多くの人から評価されていた状態から、評価されていない人々の中に導かれました。自分の望み・計画・努力で実現する状態から、自分の望み・計画・努力ではどうすることもできない状態へ導かれました。富んでいる状態から、貧しい状態に導かれました。このような変化は、自分の努力ではなく、神さまによって生じています。聖フランシスコは、それに身をゆだねています。

### 《こんにちのわたしたちに照らして》

・ **「苦い」状態の様々な形**：わたしたちは、素敵な理想を思い浮かべ、その理想に向けて努力できるときもあるでしょう。理想通りにならず、困難を抱えたり、葛藤したりしていることもあるかもしれません。

他方、自分の性格、体験、感情などにとらわれ、狭い理想を掲げて自分や他の人や状況に求め、苛立つときもあるかもしれません。自分の理想に合わず受け入れたくない自分の側面や、感情や偏見にとらわれて受け入れがたい人・物事などがあるかもしれません。狭い自分のほうが正しいと固執し、へりくだることができないときもあるかもしれません。こうしたことを「苦い」ものと重ねることもできるでしょう。自分の力ではどうすることもできない部分もあります。

何かを手放すことのできない「苦み」もあるでしょう。大切な人、所有物、環境、役割、自尊心、身体健康、生活の安定……これらはいずれ手放さなければなりません、手放すときに「苦み」「痛み」が伴います。

・ **神さまやみんなの愛情を感じられない状態**：ハンセン病の人々の置かれていた状況について、神さまやみんなの愛情を感じられなくなっている状態と重ねて思いめぐらすこともできるかもしれません。イエスさまは、そのような人々に寄り添い、共におられ、誰よりも深く受けとめ、神さまのあたたかなこころを伝え続けておられます。

・ **わたしたちの小ささ・弱さを受けとめてくださる神さま**：神さまは、わたしたちの小ささ、弱さを誰よりもよくご存じで、深く受けとめておられます。わたしたちも、聖霊の助けによって自分や他の人や状況をありのままに受けとめて、神さまにおゆだねできたら。聖フランシスコが素直に自分の弱さを認め、神さまと兄弟たちに見せているように。

### (5) 「すると主ご自身がわたしを彼らの中に導かれ、わたしは彼らと共にいつくしみを行いました。」

・ **回心はいつくしみ、あたたかなこころ**：「いつくしみを行いました」という表現は、敢えて、「回心（償

<sup>12</sup> Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.86-88; -, *Il mio Testamento. Le ultime parole di Francesco ai suoi frati*, pp.58-61.

い) を行いました」という表現と合わせているようです。聖フランシスコの回心は、あたたかなところ、いつくしみを神さまの助けによって深く分かち合う歩みです<sup>13</sup>。

「いつくしみを行う」という表現は、イタリア語でも日本語でも不自然です。ハンセン病の人々もいつくしみをを行ったという意味か、ハンセン病の人々に対していつくしみをを行ったという意味か、少し戸惑います。

いずれにせよ、聖フランシスコの回心の歩みにとって、ハンセン病の人々との交わりはとても大切な出来事です<sup>14</sup>。そして、それはいつくしみ、あたたかなところと深く結びついています。

聖フランシスコが、いわゆる善いサマリア人のたとえにおいて、サマリア人が「彼を憐れんだ」(fecit misericordiam in illum) という部分を自分なりの体験から深め、表現を変えた可能性もあります (fecit misericordiam cum illis)<sup>15</sup>。

- ・ **神さまの無償のいつくしみ深い働きかけによってへりくだり、受けとめる**：既に触れたように、聖フランシスコはハンセン病の人々に対して、遠く離れていても吐き気を催しました。にも関わらず、「彼らと共にいつくしみを行いました」。それは、神さまの助けによってへりくだり、ハンセン病の人々の痛み、悲しみ、苦しみを深く受けとめられるようになったことを示唆しているでしょう。こころを開き、自分自身をゆだね、ささげるような姿勢もあります<sup>16</sup>。上から目線ではなく、平等、公平な立場にあります。イエスさまが、人々の痛み、悲しみ、苦しみを深く受けとめておられた様子も思い起こされます。

### 《こんにちのわたしたちの生活に照らして》

- ・ **回心=いつくしみ、あたたかなところ**：「回心」ということばには、とても禁欲的な印象があります。聖フランシスコがここで述べている「回心」は、いつくしみ、あたたかなところです。

また、回心が神さまの望み・こころに生かされることであれば、神さまは限りなくいつくしみ深い方ですから、回心は神さまのあたたかなところに生かされることと言えます。神さまがほんとうの意味でいつくしみ深い方だからこそ、神さまの力によってそのところに生かされることができると言えるでしょう。

- ・ **深く受けとめること**：わたしたちは、幼い頃から小ささ、弱さ、過ちも受けとめてもらい、支えられ、ゆるされてきました。同時に、人の気持ちを想像し、受けとめる経験をたくさんいただきました。

他方、人によって、感受性の鋭い人もいれば、他の人の気持ちを想像することが難しい人もいます。人の痛み、悲しみ、苦しみに共感できるときもあれば、そうではなく「自分の考えが正しい」と思い、上から目線で非難し、傷つけてしまうときもあるかもしれません。誰も、他の人とまったく同じ立場になることはできません。

しかしイエスさまは、みことば、無力な赤ちゃん、十字架、小さな聖体の姿で、「人の痛み、悲しみ、苦しみを受けとめること」をいつも教えてくださっています。福音書における受難物語を見ますと、人の苛立ち、嘲り、怒り、憎しみ、殺意も受けとめておられます。同時にイエスさまは、十字架上でこう仰せになっています。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23・34)。わたしたちも、自分が良くないことをしていても、分かっているときもある

<sup>13</sup> Cf. 注 3; MESSA, Pietro, *Le fonti patristiche negli scritti di Francesco di Assisi*, Edizioni Porziuncola, Santa Maria degli Angeli 2006, p.246; MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.88-89.

<sup>14</sup> VAIANI, Cesare, *Storia e teologia dell'esperienza spirituale di Francesco d'Assisi*, Edizioni Biblioteca Francescana, Milano 2015, pp.87-88.

<sup>15</sup> Cf. PAOLAZZI, Carlo, le note al Testamento in *Fonti francescane. Terza edizione rivista e aggiornata*, Editrici Francescane, Padova 2011, p.99, n.2.

<sup>16</sup> Cf. MARANESI, Pietro, *Facere misericordiam. La conversione di Francesco d'Assisi: confronto critico tra il Testamento e le Biografie*, pp.83-88; -, *Per-dono per lo tuo amore. La via alla pace di Gesù e Francesco d'Assisi*, pp.102-109.

かもしれません。このような中で、今のわたしたちがいます。失敗は、誰にでも、いつでもあります。

聖霊の助けによって、自分・他者の思い・状況、神さまの思いをありのままに深く受けとめながら、あたたかなところを少しずつ分かち合えたら。聖霊の助けによって、過ちもありのままに謙虚に認め、神さまにおゆだねし、イエスさまのあたたかなところに生かされるよう願えたら。

## (6) 「また、彼らのもとを去ると、わたしには苦く思っていたことが、わたしにはこころと体の甘いものに変えられました。」

- ・ **甘さを深く体験する聖フランシスコ**：聖フランシスコは、1224年に記したとされる『いと高い神への賛歌』の結びでこう述べています。「あなたはわたしたちの希望、あなたはわたしたちの信仰、あなたはわたしたちの愛徳、あなたはわたしたちの全き甘美、あなたはわたしたちの永遠のいのち、偉大で感嘆すべき主、全能の神、いつくしみ深い救い主」。

ハンセン病の人々との関わりは、苦いものであったはずですが、それが、甘いものになりました。そのような中で、聖フランシスコは、神さまが甘い方、限りなくいつくしみ深い方であることを体験しました<sup>17</sup>。「神さまは、限りなくいつくしみ深く、小ささ、弱さも深く受けとめて、あたたかなところに生かしてくださる方」という体験は、聖フランシスコの生涯にとって非常に大きく、回心後の歩みの根底に流れ続けるものだったでしょう。

神さまのこのようないつくしみ深さは、あたたかくへりくだるイエスさまの姿に直結します。赤ちゃん、十字架、聖体の姿であたたかくへりくだり、わたしたちのすべてを受けとめ、神さまのあたたかなところを伝えてくださるイエスさまです。聖フランシスコは、そのところに生かされようとしていきます。

## 《こんにちのわたしたちに照らして》

- ・ **神さま、イエスさまに対するイメージ**：神さま、イエスさまは、わたしたちにとってどのような方でしょうか。いつくしみ深い方でしょうか。イエスさまの弟子たちも、イエスさまが十字架上で亡くなり、復活なさり、聖霊をくださるまでは、イエスさまのことを深く理解していませんでした。聖霊の助けによって、あたたかくへりくだるイエスさまの甘いところを深く受けとめることができたなら。

## (7) 「その後、わたしはしばらくとどまり、世から出ました。」

- ・ **新しい生き方を徐々にはじめる状態**：「世を出る」という表現は、当時は隠棲修道院に入ることを指しました。しかし、聖フランシスコの場合は、回心（いつくしみ、あたたかなところ、または、キリストのようにあたたかくへりくだるころ）を探求し深める歩みがはじまったことを指しているでしょう<sup>18</sup>。このように「世から出る」歩みはいつでもどこでも生じ得ます。エッセー師は、こう述べています。「わたしたちの心が憐れみ深い神のうちに、その起源と方向と目標とをもつ愛の行いに向けられるようにならないかぎり、いわゆるこの世はわたしたちのうちに残ります」<sup>19</sup>。こうしたことを踏まえると、「しばらくとどまった」という表現は、ハンセン病の人々のところにとどまったというより、新しい生き方を徐々に進めていたことを指しているかもしれません。この間に生じた具体的な出来事として、聖ダミアノ教会における十字架からの語りかけ、父親の難しい関係、司教のもとですべてを手放す出来事などをあげる捉え方もあります<sup>20</sup>。 (聖フランシスコ年記事 n.C)

<sup>17</sup> Cf. PAOLAZZI, Carlo, le note al Testamento in *Fonti francescane. Terza edizione rivista e aggiornata*, p.99, n.3.

<sup>18</sup> Cf. SOLVI, Daniele, *Commento al Testamento*, in *La letteratura Franciscana Volume I. Francesco e Chiara d'Assisi*, LEONARDI, Claudio (a cura di) e SOLVI, Daniele (commento di), Fondazione Lorenzo Valla, Arnoldo Mondadori Editore, 2004, p.464:「世から出ることは、隠棲修道院の伝統では、禁域の中庭に入ることを示す専門的な表現です。ここでは、回心を探し求め、深める歩みのはじまりを示しています」。

<sup>19</sup> カエタン・エッセー『聖フランシスコの会則と遺言—フランシスコに従う現代人のための講話—』前掲書 p.148。

<sup>20</sup> Cf. PAOLAZZI, Carlo, le note al Testamento in *Fonti francescane. Terza edizione rivista e aggiornata*, p.99, n.4.